

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2015年3月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>

2015.3

第52号

夢 う つ つ

親鸞仏教センター研究員 中村 玲太

「夢」というのは仏典中において実態のないものの喩えとして多く用いられている。そして、人生は夢、幻の如くだとも言われる。思えば今日は一体何をしたのだろうか。いやここ十年あまり何をしてきたのだろうか、とふと振り返ることがある。人生をすり減らしながら何も残っていない気がする。実在しているのかすら疑わしくなるこの人生は、まさに夢のようである。

夢と人生について忘れられない言葉がある。詩仙李白の「春日醉起言志」(春の日に酔より起きて志を言う)の一節である。

処世若大夢 胡為勞其生

所以終日醉 頽然臥前楹

世に処ることは大なる夢に若たるに

胡ん為れぞ其の生を勞らすや

所以に終日酔い

頽然として前楹に臥す

夢幻のような一生に対して、李白は「胡為勞其生 所以終日酔」としている。この句について、吉川幸次郎・三好達治著『新唐詩選』(岩波新書)には、「夢をせいぜい夢らしくするのが、人間のしごとのように、私には思える。だから私は、人生という大きな夢を、より多く愉快にするために、一日じゅう酒をのんでいるのである」と解説する。名句、名解説であると思う。ただ、李白は酔

いきていたのであろうか。勝手な想像かもしれないが、李白の飲酒には届かぬ夢に向けての祈りのようなものを感じてしまう。

李白がどうであれ、夢心地は続かない。朝には夢が覚める。あまりにも当たり前のことを言っているが、夢は覚めるものだと否が応でも気づかされてしまう。「朝は好きじゃない」ではじまる森博嗣『トーマの心臓』(メディアファクトリー)にはこんな一節が続く。

無礼な眩しさに目を細めても、自分に降りかかった既成の運命に心を閉ざすことができない以上、どうしたって憂鬱になる。ただ、その憂鬱さが軀中に染み込んだあとには、くすつと笑いが込み上げてくることもある。不思議な反転だ。

目覚めの悪さも相まって、本当に朝は厭になる。もう目覚めなくともよかったのではないか。朝はそんな頽廢的な空気が流れる。しかし、どうしたことが、通勤しているうちには厭な気持ちも隠れ、平常心に戻っているから不思議である。

もしかすると、一日のなかで、人生に嫌気がさしているとき——それはすなわち人生を少しでも直視しているとき——は朝だけなのではないか。そう考えると朝の嫌気も大切かもしれない。嫌気とつき合いながら、この現実を問うていきたい。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③①

業因縁の存在の翻り

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第76回～78回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第76回では「法蔵菩薩の修行と成仏」等について、第77回では「阿弥陀の光」等について、78回では「寿命無量」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第75回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■不可能を実現する願い

法蔵菩薩の願いは、一切衆生をたすけたいという願いです。これは不可能です。不可能けれども、それが成就しないならば自分は仏に成らないと。これは自分が完成できることを期待している願いではない。にもかかわらず、物語としては十劫の昔にもう阿弥陀仏に成っていると言うのです。それは矛盾しているわけです。しかし、そういう物語なのです。自力の教えと違って、他力の教えは、有限な人間を無限がたすけたいというわけでしょう。有限な人間を無限にしたいと。不可能です。しかし、不可能を不可能ではないのだと。不可能を実現したいという願いが本願であると。

われわれは分別の衆生ですから、考えたり、計算したり、比較したりということで苦しんでいます。そういう存在が、如来を思議することはできません。思議することのできない人間にどうやって如来を教えるか。そのときに、如来の側から衆生になってあげようと。衆生になって衆生のなかで立ち上がるのだと。こういう願が、至心・信楽・欲生の三心だししん しんぎょうと。三心共に如来の心である。如来の心は兆載永劫の修行の心である。兆載永劫の修行の心が、愚かな人間のなかに立ち上がるのだと。これを如来回向の信心と言うのだと。こう親鸞聖人はお考えになっていかれたのです。

つまり、有限を無限にするには、無限が有限に

なるほかないのです。有限はどれだけ有限を積み重ねても無限にはならない。しかし、無限は有限を包んでいる。だから無限の側が有限になることはできる。有限になった無限だと。これが「南無阿弥陀仏」なのだ。無限の大悲の願心が名になった。名において有限の衆生に無限を教える。そのためには、信じさえすれば無限の功德、無上功德を与えますと。無上功德はわれわれからはつかまえられない。けれども無限の側から、わざわざわれわれのために身を投げてくださるのだと。このようにいただきなさい、というのが回向のはたらきです。

われわれは本当に信じているのかと問われたら、信じているなどととても言えない。けれども、われわれが信じないならば、如来は成就しないのです。如来は成就しているとおっしゃるのだから、それを信ずるしかないのだと。われわれができるできないではない、初めからわれわれはたすからないのだと。たすからない存在をたすけずんばやまんという願がここに成就しているのだと。「ああ、そうですか」といただくしかない。これが親鸞聖人の言われる回向成就の信心という意味でしょう。

法蔵菩薩の修行が何のためかと言ったら、たすけることのできない愚かな衆生を、どうしてもたすけたいのだと。だから悲願なのだ。「諸仏の護念証誠ねんしやうじやうは 悲願成就のゆえなれば 金剛心をえんひとは 弥陀の大恩報ずべし」（『真宗聖典』486頁、東本願寺出版部）という和讃がありますが、「諸仏」とは、本願によって先に救われた方々のことを、後から行く人間が諸仏と仰ぐわけです。諸仏が護ってください。後から来る凡夫に、どうか凡夫よ、「南無阿弥陀仏」を信じてほしいと呼びかける。この極悪深重の世の中に、極悪深重の衆生に念仏を呼びかける。悲願成就のゆえなのだ。そして護ってください、護念証誠である。だからそれに出会うということが、金剛の信心を得ることだと。

■業因縁の存在としての自分

われわれの心は、愚かな心だし、弱い心で、本当にしょっちゅうコロコロ変わります。クッキーというお菓子があるでしょう。私はおいしいと思いますが、置いておくとすぐに湿気たり、少しの衝撃で粉々になってしまったりする。譬えて言うなら、われわれの心もクッキーみたいなものです。少し雨模様だと湿気で、天気が良いと元気になる。だからお天気次第です。いくら強そうに見える人でも、人には言わないけれど、心は弱い頼りないものなのではないでしょうか。「俺の心は変わらないぞ」と言える人はいないと思うのです。嘘では言います。「私、一生あなたを愛します」と言って、リングを取り交わして三日後に離婚したり。嘘八百です。けれど、嘘でもよいから信じたいのです。狐と狸の化かし合いと言いますが、凡夫は凡夫で、狐と狸で結構成り立っているわけです。だから、それをだめだとは言えない。そこに真実があるなどと言うから嘘なのです。

人間レベルの誓いなどは、いくらそのとき本当だと思っても、たちまち雲散霧消します。これは人間が悪いからではないのです。人間とはそういうものなのです。人間は状況存在ですから。だから、状況が悪いからそうなったと思うわけです。でも存在自身が、そうなるような存在なのです。そういう状況を引いてくる存在なのです。

「引業」という言葉があります。業を引くのです。業とは、自分で思っていないけれども、そうになっていってしまうのです。そして、相手の責任にするのです。自分は悪くない、相手が悪い。しかし、そういう悪い相手と出会う因縁は自分なのです。自分なしに勝手に出会うわけにいかない。だからやはり人間は縁を生きる存在なのです。

仏教の教えは厳しいと思うのです。嫌な教えだと思うのです。凡夫は自分の好きにしたいのです。だけど仏教はそれを許さない。お前は因縁の存在なのだ、業因縁を生きているのだと。それを、「ああ、そうだったな」と、逃げられない因縁をいただいていたからこそ、本願がありがたいのだと。そのように翻ったときに、初めて他力の本願が自分の身に起こってくるのです。翻りなのです。翻るまでは徹底的に、できの悪い存在だと教えてくるのです。それが嫌なのです。けれども、これは真実の教えだと、人間にとってどれだけ嫌でも逃げられない、そうだんだん言い当てられてきて、「ああ、本当にそうでした」となると、南無阿弥陀仏がありがたいのです。

(文責：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2014年11月～2015年1月) 一抄出

■2014年

- 11/6 第147回清沢満之研究会「清沢満之の『宗教』および『宗教哲学』における『哲学』の意味」愛媛大学法文学部准教授：杉本耕一氏(千代田区・フクラシア東京ステーション)
- 11/14 親鸞聖人ご命日のつどい
第5回『西方指南抄』研究会
- 11/17 第168回英訳『教行信証』研究会
第76回(通算第127回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 11/18 第19回『教行信証』「化身土巻・未巻」研究会
- 11/25 第148回清沢満之研究会
- 11/28 第10回研究員と読む公開輪読会「救済の欲求―『往生要集』を読む―」担当：藤原智研究員①11/28②12/5③12/12④12/19(文京区・東京大学仏教青年会館)
- 12/3 第169回英訳『教行信証』研究会
- 12/6 第24回佛教文化学会学術大会(大正大学)：大澤囑託研究員発表「親鸞伝における六角夢告の語り―その表象と変遷―」
- 12/8 平成26年度西山学会(京都・誓願寺)：中村研究員発表「西山浄土教と法華経―西山深草義の傳承を中心として―」
第4回センター会議(親鸞仏教センター)
- 12/9 第149回清沢満之研究会
- 12/12 ご命日のつどい
- 12/15 第6回『西方指南抄』研究会「院政期から鎌倉期にかけての遁世―法然の遁世は他の遁世と異なるのか―」東京大学文学部教授：菱輪頭量氏(千代田区・東京国際フォーラム)
- 12/17 第7回『西方指南抄』研究会
第77回(通算第128回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 12/20 浄土宗西山深草派宗学院研究生研究発表(京都・誓願寺)：中村研究員発表「顕意「浄土疑端」成立の検討」
- 12/22 在京大谷派関係研究者・学生報恩講兼交流会(親鸞仏教センター)
- 12/24 第20回『教行信証』「化身土巻・未巻」研究会
- 12/26 親鸞仏教センター報恩講

■2015年

- 1/8 第12回親鸞仏教センター研究交流サロン「〈孤独〉の可能性―カウンセラーの視点から―」明治大学文学部教授、日本トランスパーソナル心理学会会長：諸富祥彦氏(千代田区・フクラシア東京ステーション)
- 1/9 親鸞聖人ご命日のつどい
第10回研究員と読む公開輪読会「他力の救済とは何ぞや―『絶対他力の大道』を読む―」担当：名和達宣研究員①1/9②1/16③1/23④1/30(文京区・東京大学仏教青年会館)
- 1/13 第78回(通算第129回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 1/14 第150回清沢満之研究会
- 1/23 第8回『西方指南抄』研究会
- 1/26 第170回英訳『教行信証』研究会
- 1/28 第21回『教行信証』「化身土巻・未巻」研究会

掲載論文

- 12月 『印度學佛教學研究』第63巻第1号
藤原研究員「『教行信証』「化身土巻」所引『大集経』「忍辱品」への一試論：『往生要集』との連関から」
中村研究員「西山義特殊名目「観門」の成立過程の再検討」

本研究会では、「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起いただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第48回

悲愛の詩学

批評家

若松 英輔 氏



若松英輔 氏

2014年9月8日、東京の神保町東京堂ホールにおいて、批評家の若松英輔氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。氏は、死者は抽象的な概念ではなく実在であると言う。それを証明するものは自分に湧き起こる悲しみの感覚である。東日本大震災を経て「生ける死者」と正面から対峙しようとしている氏の死者論とは、生者が如何に死者と共に生きるか、あるいは生きているかを問うことなのだ。

今回は第一部「悲愛の詩学」、第二部「悲しみと愛しみ」（質疑応答）、第三部「悲しみの彼方」をテーマに語っていただいた。ここに、第一部からその一部を紹介する。（親鸞仏教センター嘱託研究員 大谷一郎）

■「自分の考え」というものはあるのか

皆さんもお感じになることがあると思います。自分の発している言葉が、自分が考えていることとは限りません。人は、自分の意識では考えているとは思わないことを口走ったりすることもあります。そのように出てきた言葉が、自らを救うということも多々あると思います。まず、今日皆さんと考えてみたいのは、はたして自分の考えというものはあるのか、ということです。近代という時代は自分の考え、自分の言葉というものを大切にしてきましたが、そこからいかにして本当のところにとどりつづけるのか、ということはとても大きな問題だと思います。

浄土教の伝統は、教えの前に個が消えていくという伝統だと思いますが、キリスト教でもそれは同じだと思います。しかし近代は、個というものを大切にしてきました。個が立つということは、完成への道行きなのか、不完全性の表れなのかということとは常に考えなければならないことだと思

うのです。

■死者の問題

私が死者という問題をなぜ考え始めたかということをお話しさせていただきます。私にとって大きなきっかけは2010年に妻を亡くしたということです。10年間くらい闘病し、亡くなりました。このことは私にとって、とても大きな個人的な経験でした。そして、およそ2万人にのぼる人が亡くなった東日本大震災です。私はこの震災が起こったときに、死者という問題を誰かが正面切って論じてくるに違いないと思っていました。私は、東日本大震災において最も根源的な問題は死者の問題なのではないかということ、震災が起こって間もなく感じていました。しかし、半年くらい経ってもほとんど誰も何も言わない。これはよくないと思ったわけです。東日本大震災の問題というのは死者の問題を論じることなくして終わらないのではなくて、死者の問題を論じることなくしては始まらないというのが実感でした。

私が死者という問題を書いたもう一つの大きなきっかけは、宗教が沈黙したことです。宗教が、一つの存在として死者を公に語ることをしなかったことが、私にとって極めて強い憤りだったのです。私が属しているカトリックもそうです。死者の問題を真剣に語りうる存在はそうたくさんはいません。私には宗教者はそれをやらなくてはならない存在に思えたのです。しかし、それを語ることはなかった。宗教の根源は言葉ですから、宗教家が言葉を運ぶのをやめたら、もう何もしていないことになってしまうわけです。

私が考えている死者は、「生きている死者」という言い方をしていますが、遺体とは違うのです。もちろん死者は見えません。しかし、見えないということと存在しないということは全然違います。ふれえないということと存在しないということも当たり前ですが違います。実在と概念とは根源的に違いますから、それに向き合う態度も根源的に違わなければならないと思います。親鸞を読むということは、親鸞に出会うということではなければだめです。親鸞について知るということは、それほど大事なことではない。親鸞の言葉を読んでいたら、親鸞がまざまざと立ち現れてくるということがないのだめです。そのときの親鸞は死者親鸞ではなく、生ける死者親鸞なのではないでしょうか。

■ 悲しみと愛しみ

「悲」とは含みの多い言葉である。二相のこの世は悲しみに満ちる。そこを逃れることが出来ないのが命数である。だが悲しみを悲しむ心とは何なのであろうか。悲しさは共に悲しむものがある時、ぬくもりを覚える。悲しむことは温めることである。悲しみを慰めるものはまた悲しみの情ではなかったか。

(柳宗悦『南無阿弥陀仏』)

これはご存じのとおり、^{やなぎむねよし}柳宗悦(1889~1961)です。今日、やはり皆さんと考えてみたいのは、「悲しみ」ということです。悲しみということは、現代の社会ではいつの間にか、とても悲惨なことととらえられるようになりました。悲しんでいると「早く元気になってね」と言われます。しかし、柳さんが書いたように、悲しみを温めるのが悲しみだとしたらどうでしょう。私が悲しんでいることが、誰かの悲しみを温めているのだとしたら、それは無意味なことでしょうか。人間にもし、悲しみを通じてしかわからないものがあるとしたら、われわれがやらなければならないのは、それを見極めることではないでしょうか。いつから現代は、悲しみに悲惨な色しか見なくなったのでしょうか。人間は悲しむとき、最も深く人生を生



現代と親鸞の研究会 於：東京堂ホール

きている可能性があるのではないのでしょうか。私は何かそのような感じがしています。ですから私は、目の前に悲しんでいる人がいると、この人は悲しみ抜けますように、と願います。悲しみを経験した人間は悲しみがあるから生きていけるという地平があるのを知っているのではないのでしょうか。なぜなら、悲しむときほど、その失ったものを強く感じることはないからです。

(文責：親鸞仏教センター)

若松 英輔 (わかまつ えいすけ) 氏

批評家・『三田文学』編集長

1968年、新潟県糸魚川市生まれ。慶應義塾大学文学部仏文学科卒業。(株)シナジーカンパニージャパン代表取締役。2007年『越知保夫とその時代—求道の文学』で、第14回三田文学新人賞受賞。2013年より、『三田文学』編集長を務める。批評家。読売新聞読書委員。

著書に、『井筒俊彦—叔知の哲学』(慶應義塾大学出版会)、『神秘の夜の旅』(トランスビュー)、『魂にふれる—大震災と、生きている死者』(同)、『内村鑑三をよむ』(岩波書店)、『死者との対話』(トランスビュー)、『岡倉天心「茶の本」を読む』(岩波書店)、『涙のしずくに洗われて咲きいづるもの』(河出書房新社)、『君の悲しみが美しいから僕は手紙を書いた』(同)、『吉満義彦—詩と天使の形而上学』(岩波書店)、『生きる哲学』(文藝春秋社)ほか。

共著に、『現代の超克—本当の「読む」を取り戻す』(ミシマ社)。

編著に、『小林秀雄—越知保夫全作品』(慶應義塾大学出版会)、『読むと書く—井筒俊彦エッセイ集』(同)ほか。

また、親鸞仏教センター情報誌『anjali』第27号に「私は、私の信じているものを知らない」をご執筆いただいている。



清沢満之における 「宗教」と「哲学」

—『臘扇記』を読む Vol. 2—

親鸞仏教センター研究員 名和 達宣



平生の研究会の様子

親鸞仏教センターでは、清沢満之の思想の現代的意味を究明することを目的に、設立当初より一貫して「清沢満之研究会」を開催している。現在は、1898（明治31）年8月から翌年4月にかけて著された日記であり、同時に重厚な思索がつづられたノートでもある『臘扇記』をテキストに考究を進めている。今号では、2014年11月6日に杉本耕一氏（愛媛大学准教授）を迎えて開催した研究会における問題提起に基づき、清沢における「宗教」と「哲学」の関係を確かめたい。

■はじめに

清沢の思想をめぐって、現在、共通理解として伝播しているのは、その生涯を前期の「哲学期」と後期の「信仰期」に二分し、前期の哲学的理論がやがて後期の「精神主義」として熟成されるというものである。そのような見方は、晩年に雑誌『精神界』で発表された言説、とりわけ絶筆「我信念」において「私の信念の要点」が「論理」や「研究」の挫折や否定をとおして語られていることに起因するだろう。

ところが、前期・後期の転回点と位置づけられる『臘扇記』をひもとき、日々展開される思索を追ってみると、清沢における「哲学」と「宗教」の関係は、決して単純に二分化することはできないという事実につづかる。

■理論を潜った言説

『臘扇記』のなかで最も有名な言葉として「自己トハ何ゾヤ、是レ人世ノ根本的問題ナリ」に始まる一連の断想（1898年10月24日）が挙げられるが、その直後には、ライプニッツの原子説（モノドロジー）やプラトンの理想説（イデア論）を踏

まえつつ、きわめて理論的（哲学的）な思索をもってその自覚内容が確かめられ、そこから「実際」の問題の考察を経由して「信仰と修善の関係」が吟味されるに至る。

それゆえ、晩年に提唱される「精神主義」において宗教の問題は、一見「理論」がしりぞけられ「実際」の方面が強調されるように映るが、その言説自体が厳密な「理論」の思索を潜^{ひそ}めて導き出されたものであるという事実を見過^すごしてはならないだろう。

■杉本耕一氏による問題提起

— 有限／無限、哲学／宗教 —

近代日本の仏教思想と「哲学」——西田幾多郎をはじめとする京都学派と親鸞教学・禅思想——を研究課題とする杉本耕一氏を招いて開催した研究会では、氏より「清沢満之の『宗教』および『宗教哲学』における『哲学』の意味」をテーマにご講義いただいた。氏は初めに、清沢の「宗教哲学」は、焦点を当てる時期や解釈者の視点によって、「宗教」にも「哲学」にも引き付けて解釈されることがあるが、その立場は初期から晩年まで一貫して、徹底的に「哲学」的でありつつも、「宗教（信仰）」の立場から「哲学」の立場そのものを問い直そうとする動向を含むものであったという点を指摘された。具体的には、初期の『宗教哲学骸骨』（1892年）と、その三年後に執筆された「他力門哲学骸骨試稿」（1895年）を取り上げ、前者から後者への論展開について、「有限／無限」「哲学／宗教」の関係を中心に追求していかれた。

とりわけ興味深かったのは、清沢がそれらの関係について、論じる立場の相違によって見方も変わってくるとする視座への着目である。すなわ

ち、「無限を基想とする」立場から論じれば、「無限」はすべての「有限」をその内に包むものであるために両者は同体であり、それに対して「有限を基想とする」立場から論じれば、「有限」にとって「無限」はどこまでも達することのできないものであるために別体と言わざるをえない。この視座は「哲学」と「宗教」の問題にも密接に関係しており、「哲学」はあくまでも有限の立場に立つものであるが、その立場にとどまるかぎり、自身が「有限」であるということについても究極的な答えとして決定することはできない。それは、「哲学」の立場では「有限」と「無限」との問題について、どこまでも最終的な答えを目指しつつも、理由の理由、そのまた理由へとさかのぼっていくばかりで、最後の結論にたどりつくことはできないためである。自身が有限であると決着し、その立場に立って実践に入っていくということは、有限な「哲学」を越えた立場——「無限」への視座が開かれたところで、初めて可能となるものでなければならない。このように、氏は「他力門哲学骸骨試稿」の視座に基づきながら、「哲学」と「宗教」との関係を吟味していく。

■信仰と修善の関係

『臘扇記』に目を向けると、この視座は「信仰と修善の関係」の思索（1898年10月26日）として展開されている。そこで清沢は、自力の修善を勤めることが人間の条件であると言うが、それを完遂するのは不可能であるとし、ここにおいて「自力を捨てて他力に帰す」という信仰の必然性を明かす。そして、そこからさらに他力を信ずることによって（自力の）修善は任運に成就されるのかという問いを出し、それに対しては「決して然らず」と即答し、他力を信ずればますます修善を勤めずにはいられないという意欲（自然の意念）が湧き立つと述べる。しかし、修善を勤めようとするれば、再びもとの「自力的妄念」が紛起するのを感知し、これがかえって他力を信ずることの刺戟となる。このように「信仰と修善」は交互に「刺戟策励」することによって、われわれの生涯を貫き有限から無限へと開発し続ける。そして、清沢はこの原動力をほかでもない「絶対無限なる妙用の然らしむる所」に見いだすのである。こうし

て清沢は「絶対無限」との対応関係において、初めて「修善」という実践に入っていく道——それを「修養」と呼ぶ——が開かれると述べている。

■おわりに

杉本氏の問題提起では、さらに清沢の思想の核心とも言うべき「転化」という視点を取り上げられ、それを「有限から無限への転化」、「無限から有限への転化」という二つの方向において、自らの立脚地とする西田哲学にも触れながらご指摘いただいた。そして、最後に「哲学」は「宗教」上の「実際の事実」——有限が無限に触れるという事態——の前では無力であるが、それにもかかわらず人間は「哲学」を求めざるをえず、そのような事実のなかで清沢が試みた「哲学」がいかなる意味での「哲学」であったのかということは、清沢の「宗教哲学」を理解するうえでの鍵となるであろうという問いを投げかけ、講義が締めくくられた。本研究会では、この「問い」を真摯に受け止め、より精確にテキストを読解しつつ、清沢の思想の真髓を掘り起こしていきたいと考える。

（文責：親鸞仏教センター）

※杉本耕一氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第31号（2015年12月1日号）に掲載予定です。



杉本耕一 氏

■杉本 耕一（すぎもと こういち）氏

愛媛大学法文学部准教授

1977年愛知県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、関西大学非常勤講師、大阪教育大学非常勤講師等を経て、現職。

著書に、『西田哲学と歴史的世界—宗教の問いへ』（京都大学学術出版会・2013年）。論文に、「明治日本における宗教哲学の形成と哲学者の宗教的関心—清沢満之を中心に」（『日本哲学史研究』第11号・2014年）

院政期から鎌倉期に かけての遁世

—法然の遁世は他の遁世と異なるのか—

親鸞仏教センター研究員 中村 玲太

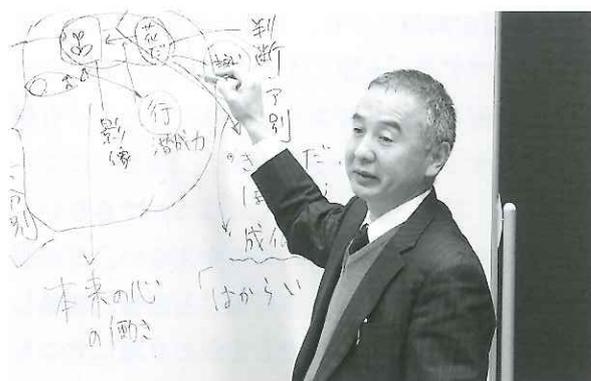
親鸞（1173～1262）の真筆として伝存する『西方指南抄』は法然（1133～1212）の遺文を集めた最初期のものである。この『西方指南抄』、ひいては法然の歴史的意義を考えるうえで、法然当時の僧侶世界の状況を把握することは欠かせないものである。そこで『西方指南抄』研究会では、12月15日に蓑輪顕量氏（東京大学大学院人文社会系研究科教授）を迎えて研究会を開催し、「遁世」をキーワードに当時の僧侶世界の実態について提言をいただいた。ここにその研究会での蓑輪氏の提言から、法然における遁世の意義について検討していきたい。

1 中世仏教を見る視座

『西方指南抄』は法然の遺文を収録するものであり、まずもって「法然」とは一体何者であったのか、という問いかけが重要であると考え。法然を歴史のなかでどのように位置づけ、法然をどう見ていくのか、という問題は、家永三郎氏等をはじめ長らく議論されてきた。

これは中世仏教をどのような視座から見るのか、ということが前提であるが、近年提唱されたのが「交衆」と「遁世」という見方である（菊地大樹『鎌倉仏教への道 実践と修学・信心の系譜』〈講談社メチエ文庫、2011〉等参照）。なお、この交衆と遁世僧は二項対立的なものではなく、交衆が中心部に存在し、遁世は周辺部に存在する僧侶たちと規定し、その関係を緩やかにとらえるものである。本研究会でも初めにこの交衆と遁世僧という枠組みについて確認がなされた。

蓑輪氏は、顕密体制論で図式的には大方問題な



蓑輪 顕量（みのわ けんりょう）氏

東京大学大学院人文社会系研究科教授

1960年、千葉県生まれ。1983年、東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業。学術振興会特別研究員、財団法人東方研究会専任研究員などを経て、現在は東京大学大学院人文社会系研究科教授。文学博士。

著書に、『中世初期南都戒律復興の研究』（1999年・法蔵館）、『仏教瞑想論』（2008年・春秋社）、『日本仏教の教理形成—法会における唱導と論議の研究—』（2009年・大蔵出版）。

訳著に『日本の宗教』（2007年・春秋社）。その他論文多数。

いとしながらも、改革派と異端派とに分ける視点が多少問題であると指摘する。何をもち改革派とし、異端派とするのか、ということが現代の感覚が入って恣意的なのではないかと。そうした恣意的な感覚が入らない史料用語を使って提示できるということで、中世仏教を「交衆」と「遁世」に分けて見る視座が妥当ではないかとする。

以下に、本研究会で確認された交衆と遁世僧、そして法然の問題について報告していきたい。

2 交衆と遁世の登場

まず蓑輪氏は、奈良中期から僧侶世界のなかでは、「行」と「学」という二つの視点が存在していたと考えてよいとして、この両者を大切にしている伝統が本来存在したのではないかとする。そのようななかで、この伝統が崩れていく出発点として、「延暦二十五年太政官符」が指摘された。この「延暦太政官符」では、学問に秀でた僧侶を高い官職に任命するとし、僧侶世界の出世の階梯が規定された。

蓑輪氏は、顕密体制のなかで、特に顕教を中心に考えている僧侶にとっては学問が大事になってくるとし、学問を研鑽する僧侶が「学侶」と呼ばれ、学侶出身の僧侶が寺院の頂点に立つ、という

形式ができてくると指摘する。また、顕教の僧侶たちは、法会、論義を媒介にして僧位僧官を得ていくことになる。こうした格式のある法会に出仕し護国に努めていくのが交衆である。

学問を中心に研鑽する人が僧侶世界の頂点に立つような状況のなか、僧侶の遁世というものが見えてくる。遁世僧というのは、名聞利養を求める僧侶世界の在り方に反対して成立したという。さらに、遁世僧成立の一要因として出自と僧侶世界の地位の問題も指摘された。

3 遁世僧の例—貞慶の場合

遁世僧として注目されるのが南都の貞慶(1155~1213)である。貞慶より少し時代は下るが、『元亨釈書』巻五・貞慶伝には、当時の僧侶世界を「浮誇」、浮ついた誇りを求めているだけだとし、そのような者たちと同じにはなりたくないと笠置寺に遁世するありさまが語られている(『大日本仏教全書』一〇一、204頁上)。貞慶は「法勝寺御八講」など格式の高い法会に出仕していたが、建久元年(1190)以降にはそのような法会には出仕していない。これは遁世したためと見られる。

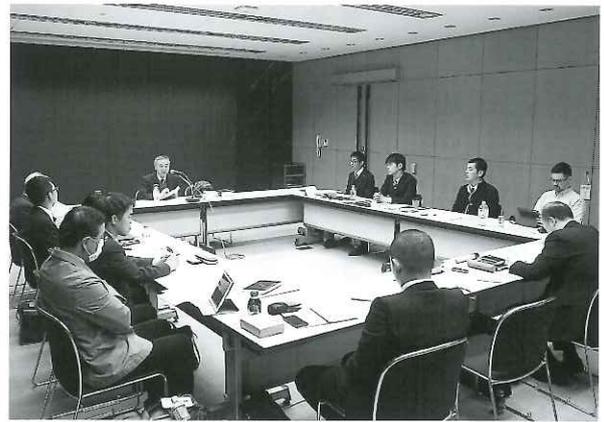
菘輪氏は、南都系の新しい改革運動は、学侶系の僧侶が遁世をして起こしていると指摘する。交衆であるときできないことを遁世僧が積極的に行い、南都の仏教界に新しい風が吹いたのである。

ただ、交衆と遁世僧との関係は緩やかなものである。貞慶にしても遁世以降も興福寺との関係は続いており、貞慶起草と言われる『興福寺奏状』は遁世以降の成立である。また、一例として挙げられたのが、『円照上人行状』で登場する如空房理然である。理然は、交衆を辞して遁世し、さらに遁世を辞めて交衆に戻った、ということが伝えられている。

4 叡山の遁世僧と法然

『西方指南抄』の「源空聖人私日記」に「久安六年^庚十八歳、始師匠乞請暇遁世」(『定本親鸞聖人全集』五、174頁)とあるように、法然は十八歳のときに黒谷の叡空のもとに遁世する。法然の遁世した黒谷は、西塔の僧侶が隠遁した比叡山の別所として有名なところである。

菘輪氏は、貞慶等南都系の遁世僧と法然の違いを指摘して、法然が山に上がるときには遁世僧が



『西方指南抄』研究会 於：東京国際フォーラム(千代田区)

拠点とするところがすでに存在していて、そこに入ったのだとする。つまり、格式の高い法会に出仕していた貞慶等と違い、最初から僧侶世界の出世を目指す学問ではないものを行っているというのが法然の特徴ではないか。遁世の立場で修学を続けており、最初から名利を離れた在り方を貫いたところに特徴があるのではないか、ということ提起された。

報告者としては、以上の菘輪氏の提言を受けて検討すべきは、法然における黒谷遁世と叡山を下りることの相違であると考え。おそらく当時の叡山の状況では、法然にとって遁世僧となることは自然の推移であったとも言えよう。そこから山を下りるという契機が問題である。法然は名聞利養から離れた在り方を模索し、真の仏道修行を求めるほどに名聞利養から離れたい人間性が自覚され、ここに山を下りる、専修念仏の道を歩むという転換があったのではないだろうか。つまり、遁世僧としての修道の結果、遁世としての在り方にも疑問を見いだしたところに法然の転換があったのではないかと考える。

いずれにせよ、法然を考えるうえで交衆や遁世僧といった当時の僧侶世界の枠組みは重要な視点であり、こうした僧侶世界の状況を念頭に置いて法然の歴史的な位置を考究しながら、『西方指南抄』の読解を進めていきたい。

(文責：親鸞仏教センター)

※菘輪頭量氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第31号(2015年12月1日号)に掲載予定です。

原文

大勢至菩薩御銘文

「若衆生心 憶仏念仏」というのは、もし衆生心に仏を憶し、仏を念ずれば。「現前当来 必定見仏 去仏不遠 不仮方便 自得心開」というのは、今生にも仏をみだてまつり、当来にもかならず仏をみだてまつるべし、となり。仏もとおざからず、方便をもちからず、自然に心にさとりをうべしとなり。「如染香人 身有香氣」というのは、こうばしき氣、みにある人のごとく、念仏のころ、もてる人に、勢至のころをこうばしき人にたとえもうすなり。このゆえに、「此則名曰 香光莊嚴」ともいうすなり。勢至菩薩の御ころのうちに念仏のころをもてるを、染香人にたとえもうすなり。(『真宗聖典』五一六頁)

《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

◆心に仏を憶し、仏を念ずれば

■弥陀の尊号となえつつ 信樂まことにうるひとは 憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもしろあり (五〇三頁『正像未和讃』)

■「聞名念我」というのは、「聞」は、きくという。信心をあらわす御のりなり。「名」は、御などともうすなり。如来のちかひの名号なり。「念我」ともいうすは、ちかひのみなを憶念せよとなり。諸仏称名の悲願にあらわせり。憶念は、信心をえたるひとは、うたがいなきゆえに、本願をつねにおもいいするころのたえぬをいうなり。(五五一頁『唯信鈔文意』)

◆仏をみだてまつる

■「須臾に西の岸に到りて善友あい見て喜ぶ」というのは、すなわち衆生久しく生死に沈みて、曠劫より輪回し迷倒して、自ら纏うて解脱に由なし、仰いで釈迦發遣して指えて西方に向かえたまうことを蒙り、また弥陀の悲心招喚したまうに籍つて、今二尊の意に信順して、水火二河を顧みず、念念に遺ることなく、かの願力の道に乗じて、捨命已後かの国に生

まるることを得て、仏とあい見て慶喜すること何ぞ極まらんと諭うるなり。(二二二頁『信卷』「散善義」)

◆こうばしき氣、みにある人

■父王、仏に白さく、「念仏の功、その状いかんぞ」と。仏、父王に告げたまわく、「伊蘭林の方四十由旬ならんに、一科の牛頭栴檀あり。根芽ありといえども、なお未だ土を出でざるに、その伊蘭林ただ臭くして香ばしきことなし。もしその華葉を噉することあらば、狂を發して死せん。後の時に梅檀の根芽ようやく生長して、わずかに樹に成らんと欲す。香氣昌盛にして、ついによくこの林を改変してあまねくみな香美ならしむ。衆生見る者、みな希有の心を生ぜんがごとし。」仏、父王に告げたまわく、「一切衆生、生死の中にありて、念仏の心もまたかくのごとし。ただよく念を繋けて止まざれば、定んで仏前に生ぜん。ひとたび往生を得れば、すなわちよく一切諸悪を改変して大慈悲を成ぜんこと、かの香樹の伊蘭林を改むるがごとし。」(二七一頁『行卷』「安樂集」)

原文

かるがゆえに、勢至菩薩のたまわく、「我本因地 以念仏心 入無生忍 今於此界 摂念仏人 歸於淨土」といえり。「我本因地」といへり、われもと因にしてといえり。「以念仏心」といへり、念仏の心をもつてという。「入無生忍」といへり、無生忍にいととなり。「今於此界」といへり、いまこの娑婆界にして、というなり。「摂念仏人」といへり、念仏の人を撰取してという。「歸於淨土」といへり、念仏の人、おさめとりて淨土に歸せしむとのたまへるなりと。(『真宗聖典』五一六―五一七頁)

《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

◆われもと因地にして

■一切菩薩のたまわく われら因地にありしとき 無量劫をめぐりて 万善諸行を修せしかど 恩愛はなはだちがたく 生死はなはだつきがたし 念仏三昧行じてぞ 罪障を滅し度脱せし (四九〇頁『龍樹讚』)

◆無生忍に在る

■「心歎喜得忍」と言うは、これは阿弥陀仏国の清淨の光明、たちまちに眼前に現せん。何ぞ踊躍に勝せん。この喜びに因るがゆえに、すなわち無生の忍を得。また「喜忍」と名づく、また「悟忍」と名づく、また「信忍」と名づく。これすなわち玄に談ずるに、未だ得処を標さず、夫人をして等しく心にこの益を憐れしめんと欲う。勇猛專精にして心に見んと想う時に、方に忍を悟るべし。これ多くこれ十信の中の忍なり、解行已上の忍にはあらざるを明かすなり、と。(二四八頁『教行信証』「信卷」「序分義」)

◆念仏の人、撰取して淨土に歸せしむ

■ただ念仏の衆生を觀そなわして、撰取して捨てざるがゆえに、阿弥陀と名づく、と。(二七四頁『行卷』「往生礼讚」)

■弥陀の智願海は深広にして涯底なし。名を聞きて往生せんと欲せば、みなことごとくかの国に到ると。たとい大千に満てらん火にも、直ちに過ぎて仏の名を聞け。名を聞きて歎喜し讚すれば、みな当に彼に生まるることを得べし。万年に三宝滅せんに、この終、住すること百年せん。その時、聞きて一念せん、みな當に彼に生まるることを得べし、と。(二七四―二七五頁 同)

「勢至菩薩の銘文」(三)

「事実が知りたい」。情報化した現代において、この要求は必然的なものだ。だが、それはときに非常に切実で深刻なものとなる。そうした場合に求められる「事実」とは、もはや単なる情報の域に止まってははいない。

「念仏の教えに触れた」とは勢至菩薩における一つの事実である。それはまた、語り手である親鸞自身にも重なる事実であろう。「仏」に出会い、また、念仏の教えに生きる人に漂う「真実の香り」を聞く。「真実」に関わる、この生き生きとしたリアリティは、私たちの求める「事実」そのものの質を厳しく問い糾しているのではないか。

(元研究員 内記洸)

現代語

「若衆生心 憶仏念仏」というのは、もし私たちが心から「仏」を思い、決して忘れることがないのであれば、ということとです。そうすれば「現前当来 必定見仏 去仏不遠 不仮方便 自得心開、つまり、まさに今ここにおいて仏と出遇うことができるし、この心のもと、絶えず仏と出遇い続けることになるのだ、ということです。誰であれ、仏から見放されるようなことはありませんし、念仏以外に、何か別の方法が必要となることもありません。仏と出遇い、仏の心を感じるところに、おのずと「真実のさとりに触れることができる、ということです。

「如染香人 身有香气」というのは、そのように念仏の心が開かれた人は、あたかも全身がかぐわしい香りに包まれた人のようである、ということです。念仏をいただいた勢至菩薩の心を、かぐわしい香りを漂わせている人に喩えているわけです。「此則名曰 香光莊嚴」と言われるのも、このためです。勢至菩薩自らの心のうちに「念仏の心」が大切に抱かれているということ、を、「染香人」という、よい香りで全身が染まった人に喩えているのです。

「勢至菩薩の銘文」(四)

私たちはいつも、「ゴール」を求めている。そのときどきの目標を一つひとつ、達成していこうとする。けれど、自分が本当に「これだ」と思うものには、いつまで経つてもどこまで行っても、辿り着けたためしはないのではないか。だからもちろん、人生の終わりにそれが手に入るといふ保証もない。

今、この「娑婆」にいながらにして「浄土」に帰せしめる、という親鸞の言葉は、私たちのこうした人生観をひっくり返す。ゴールを目指して「あちら」へ行くのではなく、「ゴールのほう」が「こちら」へと来ているのだ、と。人として求めずにはいられない、その歩み全体を照らし出すものを「浄土」と呼ぶのだ。

(元研究員 内記洸)

現代語

以上のようなわけで、勢至菩薩は、「我本因地 以念仏心 入無生忍 今於此界 攝念仏人 歸於浄土」とおっしゃるのです。「我本因地」とは、私自身も「菩薩」という、「仏のさとりに」を求めている身でありながらにして、ということとです。「以念仏心」とは、念仏の心に気づかされることにおいて、ということと、「入無生忍」とは、「無生忍」という「真実のさとり」の世界に入るのだ、ということです。「今於此界」とは、今、この現実のただ中において、ということとです。「攝念仏人」とは、念仏する人を誰一人残らず、みんな包み込んで、ということとであり、「歸於浄土」とは、念仏する人を等しく包んで、「浄土」という、誰もが帰るべき「真実の世界」に目覚めさせよう、と勢至菩薩がおっしゃったということです。

第12回

親鸞仏教センター研究交流サロンを開催 (1月8日)

親鸞仏教センターでは、これまで関わりをいただいたさまざまな分野の有識者の方々と、共通のテーマにもとづいて相互に意見交換のできる場として、「研究交流サロン」を開催している。第12回目となる今回は、フクラシア東京ステーション（千代田区）を会場に、「〈孤独〉の可能性—カウンセラーの視点から—」というテーマで、明治大学文学部教授の諸富祥彦氏（写真上）より発題をいただき、参加した約30名の方々と意見交換を行った。

諸富氏はまず、実際のカウンセリングでの経験や統計資料をもとに、いじめや自傷行為、ソーシャルネットワークサービスの問題などの事例に触れつつ、現代の老若それぞれの人間関係について話された。また、大学の食堂に一人用の席、「ぼっち席」が設置されていること背景に、「一人ぼっち」でいることが人間として劣っていると見られることを恐れ、大きな席で一人で食事ができない学生の心理を紹介。そのうえで、実は昔から「孤独」を愛する人々はおり、多様性を認めるといふことでも一人ぼっちを肯定的に見ていきたいと語られた。

次に、孤独のもっている意味についてアメリカの心理

学者、アブラハム・マズローの欲求階層説を用いて詳説。そして、人間が精神性を高める状態にあるとき、孤独が不可欠であるとマズローが語っていることに言及された。そのほか、ストーやユングなどの心理学者の論を紹介しつつ、孤独になって真剣に自分と向き合うこと（孤独力）、また、他者のその行為に深く傾聴する能力が、人生の後半を生きていく中高年にこそ必要ではないかと提言された。

続いて質疑応答では、社会学や文学、メディアや仏教などに関わる方々がそれぞれの見地から質問、発言をされ、教育現場でのさらに詳しい現状や家族関係の変化について、また、具体的な認知行動療法や、西洋と日本の孤独感の対比など課題が展開し深まっていた。



リレーコラム

「近代教学の足跡を尋ねて」(第二回)

本郷から白山通の走る谷を越えた高台に、徳川家の菩提寺として著名な浄土宗寺院がある。

——小石川伝通院。夏目漱石の小説に登場することでも知られるが、幸田露伴や永井荷風、井上哲次郎など、数々の文豪や思想家がこの境界で生活していた。

1898（明治31）年の秋、自坊で療養中の清沢満之もまた、病軀を押してこの高台にたどり着いた。新法主・大谷光演に呼び出されての上京であった。その際、清沢が身を寄せたのは、当時、第一高等学校の校長として赴任し、伝通院前に住んでいた親友・沢柳政太郎の邸宅である。清沢が寄宿した期間中、実に多くの知己がこの場所に集ったという。

やがてこのときの面会が機縁となり、清沢は東京へ移住し、真宗大学の学監に就くとともに、私塾・浩々洞が結ばれることになった。さらには偶然、沢柳宅の本棚で見つけた一冊の書を通じて、清沢の身に激震の出来事が到来する。それこそが後に「頗る得る所あるを覚え」と回想される、エピクテタスとの歴史を超えた出遇いであった。

(名和)



行事日程のご案内

■ 親鸞思想の解明

日時：2015年3月9日（月）18時30分～21時

4月 休講

5月8日（金）18時30分～21時

会場：東京国際フォーラム ガラス棟（G棟）

■ ご命日のつどい（毎月第2金曜日）

日時：2015年3月13日（金）10時～11時30分

4月10日（金）10時～11時30分

5月8日（金）10時～11時30分

会場：親鸞仏教センター会議室

上記共に、事前申込み不要・無料です。

あとがき

今号には若松英輔氏をお招きした「現代と親鸞の研究會」の報告を掲載している。氏が放った「親鸞を読む」ということは、親鸞に出遇うということではなければだめです。親鸞について知るといふことは、それほど大事なことでない。」という言葉に思わずドキッとした。

はたして私は、親鸞に出遇っているのだろうか。いや、ドキッとしたということはまだ出遇っていない証拠にはかならないだろう。日ごろ、自分が親鸞の言葉と向き合うときのことを振り返ってみても歴然である。ただ知識として知っていればいいのではないかという気持ちのまま、ここまでできてしまった。どう向きあっていくのかが今、私に問われている。（田鶴浦）